

身体拘束解除における代替手引書の有用性

独立行政法人国立病院機構七尾病院

田本奈津恵¹⁾ 寺井智佳子¹⁾ 河原彩¹⁾ 百成ますみ¹⁾ 松本喜代美¹⁾ 若森紀子¹⁾
安井正英²⁾

看護部¹⁾ 呼吸器内科²⁾

要約

【目的】昨年度、身体拘束解除（以下拘束解除）にむけた検討として複数の代替方法について報告した。今回、その活動を組織内に浸透させるため手引書を作成し、その有用性について検討する。【方法】対象は、当院の病棟に勤務する看護師 117 名とした。拘束解除に向けたカンファレンスでは、当院で作成した手引書を用いた。手引書導入前後における延べ拘束患者数、拘束実施率、日本語版身体抑制認識尺度（J-PRUQ）の得点、抑制しないための工夫について比較検討した（ $p < 0.05$ ）。【結果】導入前後における延べ拘束者数は、220 名から 97 名へ、拘束実施率では 9%から 4%となり改善した。J-PRUQ における総合得点は、有意に減少、改善を認めた（ $p < 0.05$ ）。抑制をしないための工夫では、26 件から 64 件へと増加、先取りケアや行動パターンの把握などの変化がみられた。【結語】拘束解除における代替手引書の活用は有用である。